
BAD BoyZ バドボーイズ

林辰子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B A D B o y Z バドボーイズ

【Zコード】

Z0760BA

【作者名】

林辰子

【あらすじ】

親友との幼い頃からの夢、甲子園を目指して野球強豪校に入学した伊藤由輝だが、ある事情から野球部を辞めることとなつた。

失望感と親友を裏切った責任感に苦しみ、スポーツ推薦が故に、学校に居にくくなつてしまつ。

が、あるきっかけにより出会つたバドミントンにより、彼の人生に光が戻る！！

人間関係、勉強、青春に悩み葛藤しながら最強のバドミントンプレ

イヤーを目指す一年間のスポーツ小説

……の予定へへ；

5月上旬（前書き）

私の偉大なる先輩方をモ^ガナルにさせていただきました。

まだまだ初心者ですが、お手柔らかに（笑）

5月上旬

ザアアアア…

今、オレは

「何書いてんだよ

「辞めたんだ」

学校の帰り道、ドシャ降りなのに傘も差さず

伊藤由輝と

赤羽翔真は立っていた。

伊藤由輝は、口を開け

何とか酸素を吸い込み

言葉を発した

「野球部辞めたんだ」

声がかすれてしまった。

あつ…と少し表情が緩みかけたが、伊藤由輝はすぐに元の表情に戻つた

それとは逆に、赤羽翔真は顔を歪めた。

「何で…辞めたんだよ」

伊藤はどこを見ていいか分からなくなつた。

「何で辞めたんだよ？！何でお前…」

さつきまで失望感にあふれていた赤羽の声に、怒氣が込められる。

「…」

…なんて言える立場じゃなこなご

伊藤はそう想いながらも口を合はれずと言つた。

「ハハセー、何でだ……」

声のボリュームとしては、明らかに赤羽の方がハリスコレベルに達していたが……

「何だつていいだろ……もつ……辞めたんだから」

伊藤は、無機質な笑いを浮かべてみた。

それが、赤羽のカンに障る

「ふざけんじやねえよ?ーお前、まさかあのこと忘れたんじや……」

「……」

「何か聞えたら...。」

「.....」

雨は降り止まず、一人に降り続ける。
ドシャ降つの勢いは増すばかりだ。

先に口を開いたのは伊藤の方だった。

「悪いって…おま

赤羽は再び顔を歪める。

そして、滙をきゅっと結んでから言った。

「一緒に甲子園行くって言つたじゃねえか！－
だからこの高校入つて…」

「いめんー。」

伊藤は、赤羽を無理矢理さえぎつて叫ぶように叫つた。

それと同時に、困惑しあじめた赤羽の田の前で頭を下げた。

雨はすっと降り注ぐ。

涙が出そうになつた

「伊藤つ…」

伊藤は、

「おひ黙田なんだよ

そつ吐を諂ひた

言つてしまつた。

そして、走り去つた。

「おひ…」

ただひたすらに走った。

高校に入学して早一ヶ月、新しい制服はもう取り返しがつかないくらいに濡れ、ぐしゃぐしゃだつたが、構わずに水溜まりの上を走り抜けた。

「う… わああああつ！」

泣いた

今、オレは

今、オレ伊藤由輝は

親友を裏切った

ごめん、ほんと、ごめん

言つてもダメだよな、許せないよな

オレも多分、同じ事されたら許せない

でも、ほんとごめん

許さなくともいい、

ほんと悪いと思つてゐる

約束忘れた訳じゃないんだ
約束破つてごめんな

ごめんな、赤羽。

「.....」

翌日、伊藤由輝は一睡も出来ずに学校に登校した。

私立長野新制大学附属高等学校

本部が東京都千代田区にある、新制大学の附属校で、中学、高校がある。

四年後には小学校も出来、県内初の小中高一貫教育が実現する。

県下有数の注目校だ。

野球・陸上・バレー・ボール・水泳・硬式テニスが強く、
野球においては昨年度、地区大会ベスト4まで残った。

伊藤由輝は、虚ろな目だった。

「……はあ

なのに、辞めた。

伊藤由輝は、この新制高校に野球のスポーツ推薦で入学した。
学校に野球の才能を買われたのだ。
わざわざ電車で1時間近くかけ、
ド田舎の山奥から、まだ建物の多い市内まで通つて来ている。

野球は気がついたら始めていた。

気がついたら生活の一部になつていた。

「伊藤どうした??」

「え、あ?」

今、クラスで一番仲の良い沢木寛都さわきひろじが顔を覗き込んできた。

伊藤は一瞬固まり、ニカッと笑つて見せた

「つだよ、何でもねーし別に!! 腹減へきったからテンション下げがんだよ」

伊藤は思い出したようにカバンに手を突つ込んだ

「パンいる??」

カバンから引っこ抜いた手には、六枚切りの食パンが袋ふくろごと握られていた。

「ぶつ」

沢木は思わず吹いた

「いや、いらない。つか…すっげ笑顔つける

「えーそり?」

伊藤はパンをカバンにしました

内心ほつとした。沢木には悟られなかつたようだ

「つてしまふのかよ、それネタか

沢木は肩を揺らして笑つた

「いや、ネタじゃない
マジで食おうと思った

「まだ8時過ぎたとこだろー

「だからあえての早弁つてヤツ??

「もーすぐ高校總体なんだー。」

「シカトかよ」

伊藤は顔を歪めた。沢木はへらへらしてこる。

「ううう、とんとん話を進める癖に急に話題を切り替える沢木がどうも憎めなくて好きだ」と伊藤は思った。

「オレバド部なんだけどさー」

「あー、そーいやそうだったなー??」

沢木は打つ振りをしながら話を進めた。

「来週大会だから休むわけ!! オレ出ないけど。だから授業ノート頼むよ」

「…………」

伊藤は目が点と化した。

「え、ダメ??」

「勉強はオレに頼むな」

自分でも驚くほど淡々と言った。

「お前その……バカなの??」

沢木は少し氣を使ったようだが、「バカ」という言葉が全て破壊し尽くした。

「(一)の学年で恐らく一番」

「え、だって推薦だら??.しかも(一)の学校の偏差値55だよ??.んなわけー」

「それは何かの間違いだ

伊藤は無表情に言った。それがかえってリアリティーを増させる

「実は頭いいパターンなんだろー??」

沢木はひたすら食い下がる。よくわからないが、伊藤はおかしくなつて笑ってしまった。

「野球部なんてさーだいたいみんなバカばっかなんだから…」

あつ

今オレ

野球部つて言つた…

：別に気にするような内容ではない。

野球をしていたのは事実だし、野球部だつたのも事実だ。

「…オレもバド部入るつかなー」

伊藤は思つたことを揉み消そつと言つてみた。

「野球辞めんの？野球部多いから、辞めたら何か肩身狭くねー？？」

肩身……か……

沢木は悪気はない。が、今の伊藤には辛い言葉だ。

少しずつ、朝練から上がって教室に入つて来た野球部が伊藤を見た。沢木の言つていたことを聞いていたらしく、伊藤を見つつ何か話している。

「…………」

「そーいやお前、朝練は？サボつたの？サボつたら殺されんじゃないの？」

「あつははは

伊藤は笑いたい訳でも無かつたが、笑つた

「殺されるな

野球部だつたらな……

「伊藤」

「あ？」

廊下から、他クラスの野球部が覗き込んでいる。

「伊藤集合」

伊藤は一瞬沢木を見た

「わり……」

「いいよ行つてこいよ

5月上旬 続き（前書き）

まだまだ実力が伴いません、すいません。
伊藤のキャラがぶれています…

伊藤は重い足取りで廊下に向かった。
心なしか、赤羽がいた気がする。

「……うす」

廊下には、やはり赤羽が居た。ほかに、いもやぢこつみのあ小林剣やにいむらじょうた新村涼太他：

一年八組の前は、
ボウズ頭の人口密度が高まっていた。

赤羽以外に居る六人ほどは、全くの無表情だが、赤羽は汚い物でも
見ているかのような
何とも言えぬ気持ちだった。

一年生の主将である、新村が周りに目配せをして、口を開いた。

「伊藤、お前部辞めたの？」

新村の大きな目にじろりと見られ、伊藤は思わず目を反らした。

「……ああ」

「何で

「えつ……

伊藤が反応する』ことに、赤羽の表情が険しくなる。

「あの・アレだ、勉強…さすがに野球ばっかっつーのもマズイかなーつてや?」

…はは、さすがに苦しい言い訳だ

伊藤の周りの野球部が顔を見合わせた

「……はあ?

「伊藤お前一般入試で入学したのか??

「や、違つけど…」

「何が…」

赤羽がやつと口を開いた。

「何が勉強だよ」

「……」

空気が緊張感を持ちはじめた

「オレたちは……」

進路も！体力も！時間も！青春の全てを投げ捨てて
野球にかけてこの学校に来たんだよ！勉強なんてしてると暇ねーん
だよ！！」

伊藤は、赤羽の目が一瞬潤んでいるように思った。

「……」

学生として、勉強が時間の無駄だと言い放つのはいかがなものか。
だが、赤羽の言っていることは、その空間に居る誰もに正しく思わ
せた。

「……」

「……」
「あんな“クソみたいな”とんでもなくしょうもない理由“で辞める
なんてなー！」

「オレ知つてんだからな、お前が辞めた理由」

「は？..」

伊藤は思わず、赤羽の方を向いた。その時赤羽は睨みつけていた。

「お前は野球を侮辱している。それだけはよーく分かつたぜ……」

「……」

赤羽が言つと、廊下がざわついた。

「おい、言い過ぎだ」

まずいと感じた野球部員が止めかけたが、赤羽は止めなかつた

「こいつにはこれ位言って当然の罪なんだよッ！…」

「罪だつて…赤羽やばくね」

新村は周囲をちらりと見回した。

「あー、とりあえず
マジで辞めたのかどうか確認取りたかった。
退部届出したんだよな？？
「あ……うん。」

確認取るだけなら一人で来いよ…

「あと、先輩達に挨拶言つとけよ」

「ああ、わかつた」

「全員な」

「全員？！」

伊藤は少し青ざめた

「たりめえだろ」

「全員……ってなつ……七十人……

ああ、わかつた

新村達は、用が済んだので帰ろうとした

「……がんばれよ」

伊藤はボソッと言つた

「ああ、そつちもな。」

赤羽は、一瞬伊藤を見て、去つて行つた。
他の野球部員も去る。

頑張つて……オレは何を頑張ればいいんだろうな。

~~~~~

「は？お前辞めたの」

哀れみ

「え？ああ

他責的

「何？ああそうですか」

利己的

「お前誰だっけ？？」

上下関係

「あーはいはい。頑張って甲子園行つてもーす

そして実力社会

伊藤由輝は頭を下げる。

「短い間ですが、お世話になりました。」

「……はいよ」

伊藤は、約一日かけて七十三人の上級生と監督・コーチ・顧問の所をまわった。

寛容な者は誰も居なかつた気がした。

「……」

ただ喪失感

後悔なんてしていない

……はずだ

覚悟は決めた

……はずだ

オレはまだ

野球をしたいのか??

「.....」

一日6時間の授業を終えて、部活動に所属しないものは7時間目に  
自主学習を行う。

それが長野新制大学付属高等学校のカリキュラムだ。

伊藤由輝も、シャーペンをもつて机に向かってはいた。  
大嫌いな数学の問題集を広げてはいた。

耳に入るのは遠く、

グラウンドから聞こえてくる野球部の掛け声だけである。

グラウンドで、先輩と監督の道具出して、ストレッチしたら全員でランニング、グラウンドダッシュ…

頭の中に正確に出てくる練習メニュー

自分も先週まではあそこにいたんだ。

… じてなふつに聞こえるんだ。

「 … … 」

オレ…後悔している…のか?

辞めたのに?

いまさら何を思つて…

窓の外が夕焼けに満ちてきた。  
それともにチャイムが鳴り響く。

「起立」

ガラガラ…

自主学習をしていた十人程は、立ち上がった

「礼

「ありがとうございました。」

挨拶と礼をし、ぞろぞろと人が出て行く。  
伊藤も、教科書やらを学校指定の使い勝手の悪いカバンに詰め込み、廊下に出た。

放課後の教室棟は静まり返っていた。  
日中の活気が嘘のように

ただし、野球部の声は響く。

虚しく聞こえた。

足早に、一年生の教室がある四階から一階までを駆け降りた。

伊藤は、自分でも、驚くほど急いでいるんだと思つた。

無意識の「ひき」、自分から遠ざかっていくのだろうか。

「ひわあひ？！」

ドサツ

階段を降り終わったところで、影から現れた誰かにぶつかった。

「J... to 24...」

「う、うめんなさい！！ケガはない？！すいません、急いでるんで

タタタタ

「…………何やつてんだオレ

၁၁၁

伊藤は立ち上がり、学ランをはらつてからカバンを拾い上げた。

……本当は辞めたくなかつたよ。

別に、野球が嫌いになつたわけじゃない。

野球は今でも大好きだ。

カバンを抱ぎ、一年生のロッカールーム（下駄箱）に直行した。

伊藤由輝のロッカー番号は赤の318番。

学年ごとに色分けされており、伊藤の学年は赤だった。

ガチャツ：

ロッカーを開け、上靴を脱ぎ、学校指定の通学用の靴を履く。  
上靴をロッカーに詰め込む。

ロッカーに必要無い教科書を入れる。

始めは教科書と靴を同じ場所にしまうことに抵抗を持ったが、今となつてはそんな抵抗はどこへ消えた。

こんな何にも無い毎日が、これからのおれの三年間だ。

野球人生は終わり。

せっかく大学の附属校に入つたんだ、附属校推薦とかいうので新制大学に入学して：

普通の会社に入つて、普通に結婚して、普通の家庭築いて、普通に老後送つて死のう。そうだ、そうしよう。

「おーい」

これがオレの人生設計高一編だ！…よし決まり

「おーい」

「？」

「おーい伊藤…！」

「？！」

## ライバルと新たな決意（前書き）

長くなりました。

時間がかりました。

誤字脱字ハンパないと 思います。

疲れました。でも、筆者の思い入れ、下手くそながらも伝わつたら嬉しいです。

## ライバルと新たな決意

「おーい伊藤！！」

伊藤は、声のする方を見た。

ロッカールームに内接された、中庭からである。

「沢木！」

中庭と言つても、木が一本植えられているだけで、中学棟と高校棟の間にある。木が植えてある一角以外は全てコンクリート固めだ。庭とは言い難い。

澤木は通称「ミドリムシ」と言われている一年生のジャージを身に纏い、右手にバドミントンのラケットを持ちながら、伊藤に向かつて手をぶんぶん振り回している。

「おーい伊藤ー！おー…」

ガシツ

伊藤も振り返そうとしたとき、

つまり沢木が伊藤に呼びかけた直後、沢木は後ろから頭を掴まれた。

沢木の顔は青ざめている。

「てめーバドなめどんのかアアアー！テニス出身だからってチョー  
シこいてんじやねーぞオオオラアアー！全然ベツモンなんだかんな  
アアアアアー！」

先輩とおぼしき人物は、沢木を掴んだ手を上下に揺すつた。

「いやあアアアツツ？！すいませんでしたッ あああつあうあうい？  
！」

「はは沢木」

伊藤も思わず笑つたが、沢木を叱つた先輩を見て、何となく黙り込んだ。

中庭に小さな笑いが起つた。どうやら、沢木たちバドミントン高  
校始めの一年生は、中庭でずっと素振りをし続けていたようだ。

一年生と思われる男子十五人。（ミドリムシを着ているから）

一年生と思われる男子八人。（カラフルな服を着ているから）

他はおそらく体育館内。

確かに、放課後は体育館の取り合いだと伊藤は沢木から聞いた。

『野球部のせいでサッカーの連中はグラウンドから追いで出されるし

『それあ悪かつたな

『野球部のせいで中庭での素振りが学校周辺のランニングに変わるし

『それあ悪かつたな

『…また気にする必要の無い過去を…

伊藤は思わず首を振った。

少し、沢木たちバド部男子を見るにした。

一年生の教育もあるだろ？が、これだけの数の一年生が外に出されるということは…  
よほど部内で勝ち抜くことは至難らしい。

野球はチームプレー九人のうち、一人でもいなければ試合が出来ない。

それに対してバドミントン。個人戦もある…か。

伊藤は、靴を完全に履ききっていない状態で中庭へ駆け出した。

「おーし、それじゃ素振り一百一始めー」

その声とともに、各自が窓ガラスに向かってラケットを振りはじめ る。

己のアラを見つけだし、洗い出すために。

「…………」

時々、一年生が一年生を止め、自分で手本を見せ、間違いを指摘する。

伊藤は何も考えず、ただ見つづけた。

「…………」

何か…懐かしい感覚だ

ザツ…

「…」

伊藤は、自分の横に誰かが立っているのに気がついた。

「先輩基礎打ちしてください」

先…輩…?

伊藤は隣に立っている誰かを見た。

その人物は

ラケットを担ぎ、静かな口調で、まるで女のような顔をしていた。

伊藤よりも、長身で細い。

伊藤のことなど耳にも入っていないようだった。

「え？？ああ、分かった。」

沢木を叱った一年生が歩いていった。

「お願いします。」

無愛想に言った。

その青年からは、誰からも性格が悪いと思われてしまつたが、オーラが発せられていた。

「…………」

伊藤には田も向けず、その青年と一年生は体育館へ向かう。

「おーい……」

伊藤はコソコソと、素振りしている沢木の横へ移動した。

「今の誰?」

「え?」

「今一年生連れてつた奴」

「あー…あいつね。  
あいつ中高一貫の一組の湯澤匠ゆざわたくみだよ。めっちゃ頭いい上に新制中学のバド部出身!」

沢木は素振りしながら器用に答えた。

「へー…ヤバくね? ライバルじゃん」

伊藤は、沢木の様子を伺いながら言った。

沢木はちょっと不機嫌に答えた。

「何言つてんだよ。

新制中なんて！オレら公立中学と違つて、週一のお遊び部活だしつ

「へー」

道理で中学の大会で聞いたことないわけだ

「中学の大会でなんて聞いたことも見たこともねーゼ、お遊び部活  
ツー！」

沢木は堂々と言い放つた

伊藤は苦笑した

「おー…すげ言い用」

「ま、あいつなんて抜くけど」

「おー…」

その一言で、沢木の素振りにより一層力が込められた気がした。

「オレテニス前衛だつたし。前衛つてバドと動き同じなんだぜ。」

「へー……やっぱ似てる競技だけあるよ。でもね、」

伊藤は、ずつと黙り込んでいたことを黙り込んだ。

沢木の動きをまじまじと見る。

「 んだよ」

「 お前、明らかにテニスしてるみたいな振りだけど。いいの？ それ。」

「

ガチャーン！

「えつ？…ウソおーー！」

伊藤が言い切ると同時に、沢木がラケットを落とし叫ぶ。

「おいらケツトラケツト…みんな見てるし」

「え、どじが？…どんなふう？…どんな感じ？…」

「え、ちょ落ち着けつて

まー…テニスもバドもやってないオレにも分かるんだから、相當ま  
ずこんじゃないかな。」

沢木が伊藤にすがつてきた

「もっと具体的に……せっぱ年季入つてつからなかなかなか直んねえよ

「具体的に……ちよつと離れろよ、あと黙れ。」

「いりで言わなこと、いこつ黙りそつになによな……

「うーん、なんつか雰囲気?……いつからやつてんの?えー……中学?..」

すがりついた沢木が伊藤をがつちりと掴んだ。

伊藤は思わずたじろぐ。

「五歳!..」

「うわっ……すい!」

「じゃなくビリヒ辺?…ビリがおかしい?..」

「オレじゃなくお前のセンパイに聞けよ……ってあああつ……」

伊藤が偶然目にした時計は、5時13分を指していた。

「電車が来る！1時間に一本ペースだから帰る！」「

「待つてヨシキくん！待つて、オレを助けてえ」

「お前にはセンパイがいるだろーに！－！」

沢木は伊藤を捕まえた。もう素振りどころじゃない。周囲もさすがに呆れ、自分たちのすべきことを始めている。

「あのや」

「－」

鋭い声で、沢木と伊藤

（八割沢木）の動きは止まった。

声の主は、沢木と伊藤を睨んでいた。

二人は目線を下に落とした。

湯澤とは打って変わり、身長がかなり低い。ラケットを左手に持っていることから、左利きだった。

「部活に関係無い人は邪魔しないでくれるかな？！」

「ここにこるのは、君らみたいな真面目じゃない奴ばっかじゃないからなーー！」

伊藤は少し驚いた。

「真面目じゃな…」

沢木は抗議しようとしたが、伊藤が止めた  
「じめん…！」

伊藤は笑顔で言った。

「もう邪魔しねえよ

「…………なりいいけど」

伊藤は「離せ沢木」と言って、沢木を振り払い、「じゃあな」と、中庭を後にした。

本当に電車を乗り過ごすところだったので、伊藤は迷惑をかけたチビサウスポーに感謝した。

ロッカールームを通過し、校門に向かおうとした。

ドンッ！

「うわ？！」

「ひつー？！」

ドサッ

再び誰かが伊藤とぶつかった。

「今日一回もかよ…ついてねーな

「わーつーーーーめんね？！大丈夫？！」

声の主は、地面に膝をついている伊藤に手を差し延べた。

「あ・すこませ…」

伊藤ははっとして顔を上げた

「あ、そつきの『だね…』めんね、一回も

「いやつ、大丈夫です」

伊藤はさつと立ち上がり、なぜか姿勢を正した。

さつき階段でぶつかった人と、同一人物らしかった。

すらりとした、細身のポニーテールの女生徒だった。  
シンプルな水色のバドミントンのユニホームを着ている。

「男バド？？」

「あ…いや」

「あ……そか。じゃ、ごめんね、今度は気をつけるー。」

女生徒は体育館へ走り去った。

「え？…いやちょっとま…」

「つて足はやー！」

ロッカールームを右に曲がれば校門。  
直進すれば体育館。

何だろう、何でだろう

「これを逃したら一生会えない気がする。」

「…ってオレは何を考えて…」

ガラ…ラ…

伊藤は体育館の扉を開けた。

「…って来ちゃったよーーー何やつてんだ、オレーーー！」

ガラ…ラ…キイイ…

「…って扉締まり悪いなオイーーー！」

「見学?」

若さうな男が問い合わせてきた。

「ハ・ハイ!—!」

「扉ちゃん」と閉めひよ

「ハ・ハイ!—!」

ガツ…キイイ…

しつかし締まり悪いな!—!

扉を、伊藤の全体重をかけて閉め終わると、若さうな男に「出身部」と言われた。

「あつ、小中野球部です!—あ…と小学校はサッカーも掛け持ちだ

つたよ'うな……」

慌てて答えた。

「ふーん……」

(何か否定的なあ)

バンッ

「ー。」

伊藤は衝撃音に振り返った。

三年生男子が、コートの端から端を打ち合つている。

「高校総体近いからあんま邪魔すんなよ

「……はー」

スタタ……

「あー。」

伊藤の前を、さつきの女生徒が通り抜けた。

タタ

「？」

それと湯澤匠も通った。

二人はコート内に入った

「お願いします」

「え？」

伊藤は驚いて、何が何だか分からなかつた。

一人はジャンケンをして、シャトルを打ち合つ。

湯澤はテキトーに女生徒の元まで打つ。  
それと同じだけの飛距離を女生徒も出す。

四回ほどラリーを続けた時だつた。

「どちら勝つたつけ

女生徒はしゃがんで、ネットを挟んで湯澤の顔を覗き込んだ

「オレです

女生徒は、シャトルを渡そつと、ラケットで打つとした。

「…レシーブで

女生徒は止まつた

「ちえー、分かった」

「これは…」

「よろしいですか、よろしいですか」

主審を男子部員が始めた。湯澤と女生徒は頷いた。

「ファーストゲームラブオールプレー」

「お願ひしますお願ひします」

「しあつす…」

女生徒は主審、線審など、四方向に向かつて早口にお願いしますを連呼しながら礼をした

湯澤は一礼で済ます。

湯澤とあの人で試合するのか!!

「イッポン!!」

「!!」

女生徒からのサービスショット。女生徒は吠える。湯澤はラケットを構える。

パンツ

サーブ…高い!!

打たれたサーブは大きく弧を描き、今にも天井につきそうな所で急降下した。

湯澤は少し顔を歪めて、高く相手側バックハンド奥に返した。

「男子のが湯澤。中高一貫でお前と回学年」

若い男が語りはじめた。

「女子のが室我。むろが一年生女子の一一番手。わざわざつと戻つてきて、湯澤に相手させてる。」

「は・はあ…」

「驚いてたみたいだけど、バドミントンじゃ男子より女子の方が強いっていうのはそんなに珍しくない。」

まあ、一回コツ掴んだら男子のが伸びるのは早いがな。

男子より強い女子ってのは、相手が女子だと物足りなくなつてくる。特に室我みたいなのはな」

伊藤は湯澤と室我の試合に目線を戻した。

(室我をひつていうのか…)

「ひしゃあああッ！…」

室我はポイントを取り、叫ぶ。

それに対しても湯澤はポーカーフェースだ。

「…声だせよなあブツブツ」

「……」

伊藤は隣の人物がイライラしているのを感じた。

「ポイント1 0 (ワンラブ)」

得点した室我のサービスショット。

「イッポン！…」

パンツ

バンッバンッ

長いラリーが続く。

ネット際へ落とすドロップショット

相手側奥に返す速く足の長い返球ドリブンクリアーパンッ

室我は前へ落としたり、後ろへ追いやったり、完全に湯澤をもてあそんでいる。

湯澤は、それを全て確実に返している。

これがバドミントン…

オレが想像してたより…全然激しい…

「つしゃあーー！」

スマッシュを決めた。

「…………」

湯澤は怪訝そうな顔をして、ラケットでシャトルを拾い、相手コート側へ返した。

「あっがとうござまわ

室我は受け取り、羽を整える。

「ポイント2 〇(ツーラブ)」

伊藤は湯澤を見た。

手で「待て」と相手に伝える。

湯澤は手を下ろし、構えた。

「イッポンー！」

室我は勢いよくラケットを振った。

「ーーー

湯澤は後ろに下がる

いや、まだ湯澤…

パンツ

「…

すいこ…

放たれたのは、田の前のライン、ギリ、ギリのショートサーブだった。  
ロングサーブに対し、落ちる速度が明らかに速い。

「…」

伊藤は声が出かけた

湯澤は顔を歪めた。

後ろへ行っていた体重を一気に前に持つて行き、

スライディング

シャトルを追いかけ、飛び込んだ。

間に合ひうのか？！

室我はネット前まで駆け上がった。万が一に湯澤が取れたとしても、打ち込む作戦だ。

取れ湯澤！！

腕、脚、  
目一杯伸ばし

右手のラケットを滑らせ、長く持ち替え、

湯澤はバックハンドで返した

「――」

「イヤアアアアアアアッ！――！」

ドサッ

「サービスオーバー 2 (ワンツー)」

「びっくりした」

悲鳴を上げたのは室我。

湯澤は無言で手をついて立ち上がった。

ネット前まで上がってきた室我を瞬時に判断して、湯澤はあのわずかな時間で相手側ネット奥まで返した。

前まで来た相手に速い足の長い球を返すことは至難の業。  
まして室我は女。

このサービスは湯澤が制した。

「くつ…悔しい」

室我はそう言つてシャトルを拾つた。

室我はかなり驕しのプレーを上手くやつた。  
全く同じフォームからサーブを打つた。

「すげ…」

「声出せ湯澤アーーー！」

「……」

伊藤が「すげー」と言いかけた所で隣の男が叫んだ。

「お前何でもっと喜ばねえんだよ……そんなんじゃなあ、相手によ  
つちやメンタルで負けるぞ……負・け・だ……」

体育館が静まり返る。

「声出せ声……丑をねえからてめえはポンポンポンポン点取られる  
……」

「…………」

湯澤は不満げに返事をし、シャトルを受け取った。

(すげーな…この人座ったまま表情変えずにだけー声出した…)

伊藤はちらりと隣の男を見ながら思つたが

(アレ…?…)

伊藤の視界がぼやける。

再び、体育館のざわめきが戻ってきた。

…ああ、思い出した。

伊藤は、田の奥から涙が沸いて来るのを感じた。

野球…夏の練習の田…

こんな感じに監督に声出せつて怒られ…

「……」

男は、伊藤を横目で見ていた。

……いや、でも

……野球じゃないんだ、今は

伊藤は田を「ゴシゴシ」と言った。

伊藤は笑った。

少年のように、田を輝かせながら

バドミントンって…すげえドキドキする…。

男は少し笑って湯澤に視線を戻した。

こんなにドキドキすんの…初めてだ…!  
「ワリー一球」との「ケット」の音…

パンツ

床を蹴るフットワークの感じ…

パンツ

試合の空氣感…！…

パンツ

全部が初めての感覺…！…

「あ、ヤバッ」

室我がシャトルを返し損ねた。

羽球はゅっくつと湯澤の「一トの真ん中へ落ちて行く。

ダッ

湯澤は走り、

パンッ

「つあッ?—」

鮮やかに決めた。

「ポイント2 2(ツーオール)」

すげー、すげーよー!

伊藤は思わず口をひいてしまった。

「もつと喜べや湯澤アーーー！」

また隣が叫んだ。

「…………」

湯澤は男を無視して、シャトルを受け取る。

多分、あれがあいつの一番やつやすい状況……！

「ストップー！」

パンツ

「我さんは下手打ちだけど、湯澤はショートサーブを打つ形からロングショート打ち分けてるーー！」

パンツ

パンツ

湯澤は我のスマッシュを取り、長いラリーが幕を開けた。

ゲーセンのバドミントンや……  
学校の授業のバドミントンなんかとは全然違う……

これが競技のバドミントンなんだーー！

伊藤は試合に見入った。

蝶のように舞い、蜂のように刺すって……

……おおこへーこんな感じじゃんかーー！

伊藤由輝の目の前は光に溢れた。全てが輝いて見えた。

全てが輝いて見えた。

体中がくすぐつたいくらいにウズウズしてくる。

室我さんも、湯澤も、最高にカッケエ！！

パンツ

「ナイショーーー！」

オレも、こんな風に…

こんな風に一人みたいに…

「イッポン！！」

バドミントンをやりたい！…！…！

}{ } } } }

「21-17（トウエントイーワンセブンティーン）ゲーム」

「ありがとうございました」

結果は、僅差で室我の勝ちだった。

一進一退の攻防。

なかなかの見応えのある試合となつた。

一人は握手し、礼をしてコートから出る。

伊藤は思わず拍手した。

「…アドバイス…お願いしあす」

湯澤と室我は話していた。

伊藤は目の輝きが止まらない。

「そんなに面白かつたか」

男が話しかけてきた。

「ハイ！！そりやーもーーー！」

「はは…果たして三年までその気持ちでいられるか…」

「ㄉㄉ？？」

男はボソッ と そつ 言つと、 こゝ ちに 来た 湯澤 と 話し 始めた。

「お願いします。」

室我もやつて来た。

「あー、君見てたんだー」

「...-אָלָי...」

室我が伊藤の目の前で立ち止まる。

「男バドかと思つてたー  
入部希望?」

「あ、えと… それは」

「そうか……」

室には残念がったが

八二二

- ホントに? -

伊藤がそう言うと嬉しそうに笑つた。

「じゃあいつか戦うかも。私が卒業するまでに強くなつてね。私も強くなるからー！」

伊藤は何だかくすぐつたいたい気持ちになつた。

「じやあ

「あつ……

室我は去つてしまつた。

しかし、伊藤は

強くなつてね……だつて！—

脳内では何度もリピートされ、響き続ける。

強くなつてね……と。

強くなつてしまふやう、絶対！—

高一の人生設計変更！！

オレは、三年の引退まで  
バドミントンに青春を費やす！！

よし、決まり！！

伊藤はガツツポーズを決めた

## 入部（前書き）

短い…… ^ ^ ;

こんな話になるはずじゃなかつたのにー。

『じゃあ、いつか戦うかも。私が卒業するまでに強くなつてね。  
私も強くなるから！』

強くなつてやるじやん！

絶対に！！

オレはこの高校生活、バドミントンにかける！！

決まりっ

伊藤由輝は、心中で、何度も室戸の言つたことをコピートしながら  
決意を固めた。

「せ・先生！-！」

若そつと向とか言つてよ-? ちよつと向とか言つてよ-?

「オレ、バドミントン部入部します」

「…………」

男は目をそらした

え、何この空氣

「あの……」

「…………」

え、何これ何これ

「あ…あの…ダメっすか」

「.....」

ええええええ？！？！？！

「入りたいなら入ればいい」

「…」

男は静かに言つた。

その空氣感に、伊藤は圧倒される。

「入るのは拒まない。」

「え……じゃあ

「出るものも拒まない。」

「……」

「ただし」

「一度入ったからには、それなりに鍛える」

「お前の精神をズタズタにするような口もきくへ

「ケガもさせるかもしない」

「やしてお前は、やつとオレを嫌いになる。」

「嘘くて嘘くて仕方がなくなる。それでも上を囁きし続けるやつな  
い、やつと栄光を手にする。」

「やるやしないもお前が決める」とだ。オレは、このホームで上  
に行きたい。」

「…………」

「とこひねせだ」

「…………」

男は伊藤をじっと見た

「……入部します」

そういつた時の伊藤は笑っていなかつた。

「……男子バドミントンの顧問の山本晃  
(やまもとあきら)だ。」

「一年八組の伊藤由輝です」

「入部届は担任任せ。入るなら明日までに提出。」

「……ハイッ！」

これは、人類にとっては何の変哲もない普通の出来事でも、伊藤由輝にとっては大きな第一歩であった。

絶対やつてやるや…

絶対に…！！

室我さんを倒せるくらいに強くなつてやる…

伊藤由輝は虜になつた。

高校生の競技バドミントンに。

……そして、

そのプレーヤー室我に。

「……お疲れ様です……」

湯澤が男に礼をし、体育館を出て行つた。

「あつ……」

ガララ……キイツ

締まりの悪い扉を開け、伊藤は湯澤を追いかけた

「ねえ！……待てよ

「……」

伊藤は声を掛け、湯澤はそれに立ち止まつた。

湯澤は、ゆつべつと振り返り、興味なさうに伊藤を見た。

「湯澤つてゆーんだよな?  
バドいつからやつてる?  
樂しい~?どうやって練習してんの?」

湯澤は伊藤を一瞬上から下まで見た。  
伊藤は笑顔だ。

「……」

「オレ入部することにしたんだーこれからよろしくたのむなーーー!」

湯澤は小さく息を吸い込んだ

「……」

「なつ……」

小さく言い切る。

伊藤を振り切り、湯澤は歩いて行つた。

「……」

伊藤は、怒るでもなく、悲しむでもなく、歩き去る湯澤に向かって指差した。

「やのつか、お前がそーやつてシカトできねえ位強くなつてやつか  
らなー」

分かったか！今のうちに話したい」と考えとけよ、覚悟しろー。」

「……」

スタスタスタ

シカトされた――――――――！

伊藤は微妙にショックを受けたが、湯澤はそのまま歩いて行つた。

……いや、これでいい！

絶対強くなつてやるんだから……！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0760ba/>

---

BAD BoyZ バドボーイズ

2012年1月5日21時46分発行